媒体名	毎日新聞	版／面	21面	掲載日	2026年1月29日

復興進む福島 世界に発信

神田外大生が新聞製作 裏は英語版

東日本大震災 15年

神田外語大（千葉市）の学生が浜通りの被災地を取材し、復興の現状をまとめた新聞「福島とともに」を製作し、26日、県庁で内堀雅雄知事に贈った。裏面には英語版も掲載されており、大学生が見た「福島の今」を、海外の連携校などを通じて世界に発信する。

神田外語グループは、天栄村でリゾート研修施設「プリティッシュヒルズ」を運営するなど、福島県と縁が深い。新聞製作に取り組んだのは、グローバル・リベラルアーツ学部の柴田真一特任教授のゼミに所属する3年生19人。昨年の夏休みを利用して東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉町）や除染廃棄物の中間貯蔵施設（双葉、大熊町）、被災地に進出した企業などを取材し、1ページの新聞にまとめた。

日本語と英語の震災復興新聞を内堀雅雄知事（左から3人目）に贈呈する神田外語大の学生や関係者＝福島県庁で

「未来創る英知と覚悟」と大見出しを掲げ、新たな特産品作りや農業の復興に挑戦する若者を目立たせて将来への希望を強調する一方で、中間貯蔵施設の除染土の県外最終処分に道筋が立っていないことや風化を懸念する声も伝えている。

また、プロジェクトの一環として、広野町のバナナを使ったビール「綺麗ALE」も開発した。今後、東京都内などで提供されるという。

県庁であった贈呈式で、ゼミ長の関口椋久さん（21）は「（新聞を通じ）人と人をつなぐ役割を担えたらいいなと思う」と話した。また、英語版を担当した長田紬さん（21）は「大学には外国から来た先生や留学生も多く、そのネットワークを活用して復興に関わりたい」と述べた。

神田外語グループの佐野元泰理事長は「福島の復興は現在進行形で、今後も関心を持ち、寄り添いたい。学生には、自分の経験を通じた言葉で世の中に語りかけてもらいたい」と期待した。

【西川拓】

※無断で複製・転載することを禁じます